

安部公房の言語論的転回

——パヴロフ的言語からクレオールへ——

山西 将 矢

一、はじめに

「《標準語》にくらべれば外国語に近い言語で成り立つ安部公房の世界」⁽¹⁾と平岡篤頼が言うように、安部文学の特異な世界観をその言語に帰する論考がいくつか見受けられる。例えば渡辺広士は安部が用いる言語を「安部語」と呼び、それを「象徴性、内面性、深さ……等々の観念が沁みついていた伝統的な文学言語」と「経験的な事実と一つになっている言語」⁽²⁾の二つから切り離された「新しい文学言語の発明」だと評価している。また、クリストファー・ボルトンは「ある時は科学的であり、ある時は文学的である」、「異なる文体間の相互作用」に「安部作品の際立った特徴」を見ている。⁽³⁾あるいは渡辺が安部の特徴とした「科学者の言語」「オブジェクティブな言語」「乾いた文体」⁽⁴⁾は、荻部直の「安部の文体は、よく硬質だとか科学的だとか評される」という言葉と相即している。⁽⁵⁾そして

「安部公房のきわめて即物的、生理的な比喩に強い関心を抱き」、「安部公房レトリック事典」の編集に取り組んだ谷真介においては、文体への関心はそのまま表現への関心に結びついている。いずれにしてもこれらの評者が言いたいのは、安部の文学世界と言語が不可分なものであるということだろう。

その一方で、安部の言語観が詳細に論じられることは少ない。鳥羽耕史はシュルレアリスムとパヴロフを融合させた初期の安部の言語を「パヴロフ的言語」と呼び、「大脳に生理学的基礎を求めたパヴロフに基づく彼の言語観に基本的な転換はなく、『死に急ぐ鯨たち』(新潮社、一九八六年)などでチョムスキーやピッカートンに関心を寄せ、ピジンやクレオールに可能性を見た思想なども、その延長線上にあったと見ることができよう」と述べているが、⁽⁶⁾趣旨は筒井康隆の言語観との比較であるため、「パヴロフ的言語」以降に筆は割かれていない。また、沼野充義、今福龍太は安部の死後間もなく、安部が晩年に興味を抱いていたクレオールの問題について考

察しているが、焦点を当てられているのは八〇年代の「もぐら日記」(一九八五年)から後であるため「パヴロフ的言語」との接続は図られていない。つまり、時期ごとに安部の言語論をまとめた研究はあっても、初期の「パヴロフ的言語」から後期のクレオールまで通時的に論じた文章は未だ書かれていないのである。

本稿の目的は安部の言語観の変遷を論じることである。小説が言語芸術である以上、それは新たな角度から「安部公房の世界」に迫る端緒となるはずである。

二、パヴロフ的言語

安部は養老孟司との対談「文明のキーワード」(一九八七年)で自身の言語観の変遷を語っている。言語について「極めて唯物論的な解釈ができるんじゃないかなろうかと昔から思っていた」とし、「一番最初」に関心を持ったのが「大脳生理学者のパヴロフの条件反射理論」だと言う。安部が評価しているのは、パヴロフが条件反射の延長線上で言語をひとつの「生理現象」として捉えていた点である。安部によればパヴロフのこの言語論は「『大脳生理学』の最後のところ」に書いてあるようだが、管見の限りパヴロフの『大脳生理学』という題名の本は邦訳されていない。ただし、「最後のところ」で言語論が展開されているという情報から、安部が出典にしているのは『条件反射学 大脳両半球の働きに就ての講義』(林謙訳、三省堂、

一九三七年五月)ではないかと推測できる。

安部がパヴロフに言及した時期は早く、『終りし道の標べに』(一九四八年)でデビューして間もなく発表された「シュールリアリズム批判」(『みづゑ』一九四九年八月号)の時点ですでに確認できる。この時期に翻訳されているパヴロフの著書で、尚且つ言語について言及しているのが同書なのである。興味を持った動機はわからないが、東京帝国大学医学部時代に手に取った可能性は高いだろう。

安部は「シュールリアリズム批判」においてデフォルマシオンを説明する際に、「われわれは非合理を深層作用であるパヴロフの第一系、合理を抽象能力である第二系という言葉によって置換えねばならぬ」と述べている。このシュールリアリズムとパヴロフの接続について鳥羽耕史は次のようにまとめた。

ここである第一系とはよく知られたパヴロフの条件反射のことだが、パヴロフはさらに意識や言語を担う高次のシステムとして、条件反射第二系を構想していた。その後否定されたこの学説は当時のソヴェエトの公式イデオロギーとなっており、言語や無意識をも生理学的な基礎の上に位置づけようとするその学説を安部も支持していた。そしてその観点からシュールリアリズムや芸術を理論づけようとしたのである。⁽⁸⁾

「言語や無意識をも生理学的な基礎の上に位置づけようとするそ

の学説」とは先に見た、養老との対談におけるパヴロフ評の際に重視された点と同じである。つまり言語や無意識を人間の身体に根付いた「生理現象」だとする、極めて「唯物論的な解釈」のことである。しばしば現実離れた作風だと言われる安部文学であるが、その発想は身体感覚に結びつけられている。前衛芸術運動の渦中において安部がいかにパヴロフを重視していたかがわかるだろう。あるいはまた、「パヴロフは言語機能を人間と動物とを区別する大きな鍵であると考え、すでに動物にある反射活動（第一系）に対してさらに高次の系（第二系）を考えた」とし、「第二系を意識領域であると定義しても差支えないと思う」という文章からは、後に「もぐら日記」で展開される言語論の萌芽がすでに見られる。

これらは前述の『条件反射学 大脳両半球の働きに就ての講義』により裏付けられている。

パヴロフは動物実験を通して条件反射について研究した『条件反射学』の最後の章を、「動物の高次神経活動に関する今や得られた知識を、人間の高次神経活動へと移しゆくと言う問題」の「展望」に割いている。「人間が量る可からざる程高く他の動物から距てられて居るのは、正にこの高次神経機能」であり、「正に此の機能こそ、全動物界にあつて、人間に於て最も高次となっている」（五四九頁）とパヴロフは書く。そして人間の「高次神経活動」における最たるものが言語だと解釈している。「もつと大きい、人間しか有つて居ない、所謂信号機関があるに違い無い。而も其の信号機関と云うの

は、私共の言語と云うものである」（五六八頁）とし、次のように述べている。

言語と云うものは、勿論人間に対しては全く実在性を有った条件刺激である。恐らく、他の動物界に見られる所の条件刺激と全く同じ様に、重く見て差支えないと思われる。然し、言語と云うものは、極めて著しい、且つ非常に多角的な刺激であるからして、他の動物界には、量的にも、質的にも、人間の言語に類するような刺激は一つも無いのだ。成人となった人間に対しては、言語はそれまでの全生涯を通じて外からの、或は内からの刺激と共に、大脳両半球に到達して居るであらうし、且つ、非常に強い結合をして居るに違いない。だから言語は、信号として使われて居る総ての刺激を代理するものであり、従つて言語は、生物の凡そ刺激によつて起る様な凡ての反応を、悉く起させても少しも不思議はないのだ。

（『条件反射学 大脳両半球の働きに就ての講義』

五七〇～五七一頁）

パヴロフはここで、言語を「動物界に見られる所の条件刺激」の延長線上に置いている。しかし、「動物界」には人間の言語に匹敵するような刺激は「一つも無い」。動物の神経活動と同一線上にありながら、しかし量と質ともに比べるべくもなく飛躍したのが人間

の「高次神経活動」であり、人間は動物よりも一段高次のシステムを得ることで、唯一無二の信号機関、言語を身につけたのである。それは「信号として使われて居る総ての刺戟を代理」し、かつ「生物の凡そ刺戟によつて起る様な凡ての反応を、悉く起させても少しも不思議はない」のである。安部が依拠しているのはパヴロフのこの言語観だ。

パヴロフ理論の理解の仕方は安部の関心とともに変化していく。「文体論雑感」(『思想』一九五五年一月号、後「文体と顔」に改題)では「言語と認識は第二次条件反射という一つのものの異った側面にすぎない」とされている。「シュールリアリズム批判」の段階だと「非合理」「深層作用」の第一系と、「合理」「抽象能力」の第二系に分けていたのだが、ここでは一歩進んで「抽象能力」が「言語」と「認識」へと腑分けされているのだ。この考え方はやがて視聴覚芸術論と結びつく。

羽仁進や岡田晋らとの「映像論争」の流れで発表された「実験映画のシナリオ」(『芸術新潮』一九六〇年三月号)において、安部は「人間はたえず新しい映像にぶつかって、それまで持っていた言語体系を破壊され、今度はそれに対応する言語構築をまた始める」と書き、そのような「言語と映像の衝突」による「未知の世界の発見」を目指すべきだとした。ここで言われる「言語」とは「セリフや字幕などのこと」ではなく、「芸術表現のすべてに潜在している、本質的な機能」のことだという。それは、第二次条件反射としての「言

語と認識」のことにちがいない。実際安部は「実験映画のシナリオ」と同じ月に発表された「映像は言語の壁を破壊する」(『群像』一九六〇年三月号)の冒頭で、事物を名付けることにより物と物との関係を織り上げ、世界に対する認識をより複雑かつ明瞭にする言語の作用について述べたあとで、「こうしてわれわれの堅固な日常世界が構築される、パヴロフはこれをステロタイプ、安定化した条件反射と呼んだ」と書いている。ここで「言語」とは、人間の世界認識のことである。文学と視聴覚芸術は対立物などではなく、もとより「芸術的創造とは、言語と現実との癒着状態——言語という壁にとりまかれた、ステロタイプの安全地帯——にメスをいれ、異質な言語体系をつくり出す」ものであり、「それはむろん同時に新しい現実の発見でもある」ということだ。「言語(＝意識)」と定式化されていることから、この概念の広さがよくわかるだろう。

安部がパヴロフから得た「唯物論的な解釈」とは、言語を「高次神経活動」という下部構造から演繹される上部構造として捉えることである。それにより人間の意識は形づけられ、「堅固な日常世界が構築される」。ゆえに優れた芸術や何らかの対象との出会いにより「言語体系」が揺さぶられることは、硬直した世界認識そのものの更新を意味している。

安部の言語論は人間の生理学と切り離せないものだ。依拠する学者は変化しつつも、その根本にある思想は変わらず、通底しているのは言語を「生理現象」とする「極めて唯物論的な解釈」にほかな

らない。以下その変奏を概観していく。

三、角田の言語

一九六六年の桐朋学園短期大学部芸術科演劇コース教授就任とともに安部は演劇の理論化を図る。しかし「言葉ってのはいつでもステロタイプになりやすいんだよ」という発言が見られる、いいだもも、中原佑介との座談会「言語と存在をひきずって——コレステロールが点火する関節の美学」（『季刊 フィルム』一九六八年一〇月号）でなされた、人間のアクションは関節に支えられていて、「大脳」というものは、絶えずこの下部（＝関節…引用者注）からの刺激によって条件反射が形成される」ため、「言語とアクション」及び「関節と言語の統一」を指すべきだという発言は、基本的にパヴロフ的言語観から変化していない。また、桐朋学園の講座「言語の崩壊と空間認知の関係、俳優でなく演劇芸術科へ——桐朋学園土曜講座」（一九七〇年）も同様である。安部はこの講座で、赤子が発する幼児型言語は、空腹を感じても言葉を発すれば母親によってそれが満たされるという「条件反射」に起因するとし、あくまで外界を認識する「信号」だと捉えている。そのため、成長するにつれて「信号が外界に分化」していくのと、「言語がある構造をもって分化して体系化していくのはほとんど同じこと」なのである。外界との相互交渉から発生する条件反射としての「信号」が言語であり、そ

の習熟度が世界の解像度と直結するという発想は引き続きパヴロフの影響下にある。そのような幼児型言語、また退行言語、溶解言語を用いるイヨネスコの芝居は硬直した言語を揺さぶるものと評価している。「演劇講義ノート」（一九七一年）は、コンラート・ローレンツ『攻撃 悪の自然誌』、エドワード・ホール『かくれた次元』、ハロルド・ピンター「かすかな痛み」を参考文献に自らの演劇論を綴った貴重な資料だが、「人間の脳には、新皮質と旧皮質」があり、「このうちの旧皮質が動物に近い働きをする」ものだとする考えは「シュールリアリズム批判」へと、そして「新しいことばを再発見する」ために大脳の訓練が必要だとする思考は「文体論雑感」へとそれぞれ通じている。以上のように、パヴロフの影響は思いのほか根深い。

この時期の安部に大きな衝撃を与えたのが角田忠信の言語論である。角田への最初の言及は「大脳の分業——周辺飛行33」（『波』一九七四年七月号）で行われた。ここで安部は角田の論文「日本人と西欧人の文化型と音認識」（『言語』一九七四年六月号）から受けた衝撃について語っている。一言でまとめると、安部の感銘は、角田が「日本文化の特殊性」を「脳レベルの生理現象として実証」したことに由来している。安部の理解した角田理論は以下のようなものだ。通常、人間の脳は左右半球に分かれ、左脳に言語を理解する論理的機能が、右脳に言語以外の音楽や機械音などを受容する感性的機能がそれぞれ局在している。ここまでは全ての人種に共通する法

則であるが、角田が同論文において明らかにしたのは、西欧人なら右脳で処理する虫の鳴き声や小鳥のさえずりなどの自然音を、日本人だけが左脳で反応してしまうことであつた。角田はその理由を、子音と母音の組み合わせを単語の基本単位にしている言語とは異なり、日本語は母音だけで言葉の構造を作ることが可能な唯一の言語だからだと説明する。そして角田は「感性的な音が無意識のうちに論理・知的な言語半球にとりこまれて音認識をする日本人」と「無意識のうちに言語半球から閉め出されて音認識をする西欧人」の「感覚は明らかに異質のものであり、この差が精神構造にも影響を与える可能性は充分に考慮する価値がある」と結論する⁹⁾。

角田への傾倒が言語機能を「生理現象」に帰するパヴロフへのそれと同様であることは明らかだろう。以降も、「日本人と西欧人の文化型と音認識」を含む角田の『日本人の脳 脳の働きと東西の文化』(大修館、一九七八年二月)への言及は続いていくが、基本的な理解は変わらない。ただし、角田により示された左脳と右脳という弁別が、やがて論理と感性へ、そしてデジタルとアナログへと変化していくことについては触れておかねばならない。

安部は左脳の「デジタルの感覚」に論理を、右脳の「アナログの感覚」に感性を割り当て、左脳のデジタル感覚が優位に立っている現代において右脳のアナログ感覚の復権を説いている。そして「僕にとって小説というものは、左脳の言語というものを媒介にして、いかに非言語に挑戦するかということ」だと述べ、「文学、小説と

いうものはあくまでもデジタルなものを媒介にしてアナログなものに挑戦していくもの」と定義している(「言葉と肉体のあいだ」於早稲田大学小野講堂、一九七八年一〇月一八日)。

洋の東西の違いを「脳レベルの生理現象として実証」した角田の言語に独自の解釈を下すことで、安部は単なる言語論を超えた視野を手にすることができた。とはいえ、デジタルとアナログという区分自体人間の「生理現象」に基盤を置くものである。この時期の安部の発言を見ると、「生理的」というのは、神秘的ではないということであり、「生理化」ということは、共通の言語に立とうということなんだ」と考えていたことがわかる。それは「伝達」の問題と不可分であり、「既成の合言葉や身分証明が通用しない場所」でコミュニケーションを取ろうとすれば、「概念からイメージネーション」、「イメージネーションからさらに生理的な裏付け」へと遡行し、「何となく感じて納得できる生理的共通言語」に頼るよりほかないのである(『都市への回路』『海』一九七八年四月号)。

以上のことから読み取れるのは、角田により明らかにされた左脳と右脳の優劣位から出発して、民族を問わずすべての人間が共有する大脳の「生理現象」に訴えかけるような「共通言語」を安部は模索していたということである。

四、パヴロフ／ローレンツ／チョムスキー的言語

——言語のバイオ・プログラム説

安部の死後フロツピー・ディスクのなかから発見された「もぐら日記」（一九八五年）は、沼野充義によれば「晩年の安部公房の心を捉えていた問題を生々しく伝える貴重な遺稿」であるが、その過半はパヴロフ、ローレンツ、チョムスキーに依拠した言語の考察に割かれている。

「パヴロフ、ローレンツ、チョムスキーという三頭立ての馬車に乗り込んで」安部が目指したのは『言語』という大岩礁の露頭であつたが、「思想の梃子の支点としての『言語』」を考へるようになったきっかけは、NHKで行われた分子生物学者渡辺格との対談「物質・生命・精神そしてX」（一九八五年五月四日）に備えて『分子から精神へ』（朝日出版社、一九八〇年三月）という本を読んだことであるという。上記の本は「肉体と精神の二元論」に終始し『言語』というキーワードが完全に欠落^⑩していたため不満を持つた安部は、「分子生物学から精神への手懸りは『言語』にあるはずだ」と考えて独自の思索に踏み切つたのである。そこからチョムスキーの「生成文法」、次いでパヴロフの「条件反射第二系」、そしてローレンツまで発展させていく。「チョムスキーやパヴロフに欠けていたのは、まさにローレンツの方法だったから」である。チョム

スキーが言語学の立場から「生得的な（遺伝子レベルに組込まれたもの）」としての言語という「仮説」に辿りついたのとは反対に、パヴロフは脳の実験生理学の立場から高次条件反射としての言語という「仮説」を予見する。言語学から生理学へ、生理学から言語学へという両者のスタンスを仲立ちするのがローレンツなのである。一見奇妙に思える組み合わせであるが、川本茂雄が書くように、ローレンツとチョムスキーの理論は相互に「対応」している^⑪。いずれにしろ安部の関心は「生得的な（遺伝子レベルに組込まれたもの）」としての言語に向けられている。

安部はまず言語の誕生を考へるにあたって、「開かれたプログラム」という「人間固有の存在様式」に注目する。「開かれたプログラム」とは「もぐら日記」のなかで安部も言及しているローレンツの『鏡の背面 人間的認識の自然誌的考察（上、下）』（谷口茂訳、思索社、一九七四年八、九月）において用いられた言葉だ。「環境世界についての（ゲノムには含まれていない）情報を、たんに獲得するだけでなく貯蔵することもできる認識メカニズム」のことであり、安部はそこに人間固有の言語の可能性を見たわけである。安部とローレンツが袂を分かつのは、動物から人間への移行をめぐつてである。言語を軽視し「人間固有の存在様式」を認めようとしないうローレンツとは異なり、安部は「動物と人間をへだてている『言語』の壁は彼が思っている以上に決定的なもの」だと考へる。「突然の移行」の分岐点にローレンツが本能の衰退である『家畜化現象』

を置いたのに対し、安部は「言語の標識」を立てる。そして『《言語》の誕生はまさに、『遺伝子』レベルでの出来事だったのである」と結論付ける。ローレンツがあくまで人間を動物の延長線上に置こうしていた一方で、安部はそこから切り離された人間の固有性に目を向けている。そのため、「はじめに『《ことば》ありき』という『《ことば》は、人類の誕生に関するかぎり生物学的に正しい』と言うことになる。ローレンツの動物行動学に依拠しつつそれを批判すること、安部はチョムスキーとパヴロフから得た遺伝子レベルで組込まれた生理現象としての言語という「仮説」に取り組んだのである。言語の誕生をめぐる差異は、互いの言語観においても可視化する。

ローレンツが「記載なしですます」という当世流行の錯誤」(R・I・エヴァンズ『ローレンツの思想』日高敏隆訳、思索社、一九七九年七月)において記した「自然発生的言語は、主観的な心理的事実をもっとも微妙な形で反映しています」「それゆえ、質的に限定できるような人間の動機づけに対して言語が作り出した単語はすべて現実存在するものと実際に対応するという事実を、目の子算のような大雑把な規則ではあるが、それでも科学の取り組むもっとも野心的な企てへの最初のアプローチにおいては非常に貴重な助けとなるものとみなしてよいでしょう」「多くのそのような単語―愛、友情、憎しみ、嫉妬、羨望、情欲、恐怖、激怒―がありますが、それでもその数には限りがあります。事実、私は今これ以上は考えつきません」(二二四―二二五頁)といった文章をやや不正確に引用

したあとに、安部は「言語はただの語彙集なのだろうか」「それもそんなに貧弱な辞書なのだろうか」と疑義を呈している。安部にとって『《言語》の渦で占められた星雲』こそが「意識の総体」なのであり、人間は夢の一部を除くと『《言語》の雲に取り囲まれている』ような生物なのだ。そもそも「想像自体がすでに『《言語》による意識化の作業』にはかならない。あたかもラカンやソシュールの思わせる記述である。安部にとり言語の複雑さとは『《言語》の定義』が「いわば定義の定義である」ことに由来している。ローレンツが言うような現実に存在するものと一対一で対応するものなどではなく、それ自体が世界の輪郭を定めるものなのである。この言語観の違いは、言語と現実の結びつきを必然的なものとしたクラテュロスから、言語の恣意性を論じたソシュールにまで至る言語学の流れと一致する。

ともあれ、ひとつの言語がある共同体に流通するためにはそれなりの人数が必要である。安部は『生成文法』の理論をもとに「群を形成していさえすれば、おのず『《言語》』が習得されるような能力が、遺伝子のなかに組込まれている」と推論し、「より多くの群を組織できる能力」と『《言語》能力』は「不可分な関係」だと考える。安部によれば、『生成文法』により組み込まれた普遍文法が各集団によって異なる個別言語を生み出し、それを紐帯にして独自の文化を備えた国家が誕生する。言語とは世界を認識するためのレンズであると同時に、個々人を結び付け集団を織り上げるための糸でもある

るといわけだ。それゆえ《国家》とは「壮大な《言語》の伽藍神殿」以外の何ものでもない。後に続くクレオールへの接近は、とりもなおさずこの「伽藍神殿」を突き崩すための戦略であつたにちがいない。

五、ピジン・クレオールの言語——異文化との遭遇

安部がクレオールの文字を最初に記したのは一九八六年七月一三日付のV・グリーンブニン宛の書簡においてである。同書簡で安部は「ピジン語とクレオール語」に「興味」を持ち「いろいろ本を読みあさつて」いる旨を告げている。「興味」を持った理由は「なかなか深刻な、人類の文化の本質にせまる重大な問題」をそこに読み取ったからである。また、正確な発表時期は不明であるが一九八六年七月に書かれたと推定される「ピジン語の夢」では、デレック・ビッカートンの『言語のルーツ』（笈壽雄、西光義弘、和井田紀子訳、大修館書店、一九八五年四月）を読みピジン語とクレオール語を知った経緯が書かれている。安部のクレオール理解は、同書とロレト・トッド『ピジン・クレオール入門』（田中幸子訳、大修館書店、一九八六年七月）に由来している。付記しておく、異言語の接触により生まれた中間言語がピジンであり、それが定着し母語になったのがクレオールである。

安部のクレオール観を知るために読むべきはやはり「クレオール

の魂」〔『世界』一九八七年四月号〕だろう。安部の言語論の「思想的完成」がなされ、⁽¹³⁾「クレオール語への関心」が「もつともまとまつた形」で記されているからである。⁽¹⁴⁾

「クレオールの魂」の議論は「もぐら日記」と地続きである。すなわちそれは『言語』の誕生はまさに、『遺伝子』レベルでの出来事だったのである」という問題意識の共有である。安部によると各地のクレオールから「共通の法則」が抽出されるという事実は、「言語能力」が「遺伝子レベルでプログラムされたもの」だとするバイオ・プログラム説の傍証になり得るという。しかし「言語能力のバイオ・プログラム説は、なにもビッカートンが最初の提唱者ではない」。彼に先んじて、「言語の基礎を生得的な生理現象」に置いたパヴロフ、「プログラムをプログラムするプログラム」と言語を規定したローレンツ、言語能力を「生得的なもの」とした生成文法のチョムスキーという「バイオ・プログラム説の先駆者」がいるからだ。ただ、「先駆者」たちの仕事は「たぶんに情況証拠的な限界」を持つていたのに対し、ビッカートンは「クレオール形成という物的証拠を提出」した点において際立っていると安部は考えた。「先駆者」たちが示したのはあくまで抽象的かつ観念的な言語一般であったが、それとは違い、ビッカートンが具体的な例証としてクレオールを「提出」したところに安部は感銘を受けたのであり、クレオールへの期待はそこに起因する。

クレオールとは「辺境における《異文化の接点》で起きた現象」

であり、それゆえ伝統に縛られることのない「創世記の言語」だというのが「クレオール魂」の要点である。互いに異なる言語を使う集団が接触した際の中間言語として誕生するピジン及びクレオールは、相互の言語にある規則や慣習が簡略化され、独自の体系を持った言語に作り直される。比喩的に書けば、『言語』の伽藍神殿を解体し、同じ部品を歪曲しながら使って異なる「伽藍」を建設してしまうクレオール化の過程にこそ、安部は伝統からの自由と解放を見たのである。「都市への回路」で語られた、「既成の合言葉や身分証明が通用しない場所」でのコミュニケーションを追い求める旅の果てに辿り着いたのがクレオールであった。

安部と同時期からクレオールに言及していた作家に井上ひさしがいるわけだが、「クレオール魂」と同じく雑誌『世界』に一九八七年から一九八九年まで断続的に発表された「グロウブ号の冒険」では、物語展開においてクレオールが重要な役割を担っている。宝の在処を示す暗号を解くのにクレ奥ールの知識が必要なのだ。井上によると、「グロウブ号の冒険」執筆時に安部からクレ奥ールの題材にするならワープロで書くよう忠告されたという。⁽¹⁵⁾このことから安部が、個人の癖や特徴を不可避的に刻んでしまう肉筆ではなく、中性的かつ即物的なコンピュータの文体こそがクレオールにふさわしいと考えていたことがよくわかるだろう。そしてそれは言うまでもなく文学の問題である。

六、クレオール文学、あるいは関係の詩学

クレオールとの出会いは安部の言語論にひとつの転回をもたらした。「関係」という視座の獲得である。それが異文化接触の形で記述されているがゆえに安部を「ナショナリズム批判を視点の中心においたクレオール主義者」とした今福龍太は、他の論者と安部の「決定的な違い」として「自らの創作という行為を通じて具体化していったという点」を挙げているが、むしろ安部の特異な点はクレオールを文学論として省察したことである。⁽¹⁶⁾

安部は「クレオール魂」の末尾で唐突に文学論を展開する。「伝統からはかぎりなく遠い、クレ奥ールの魂を思わせる中性的な文体で地面を掘りすすんだ作家たち」としてカフカとベケットの名を持ち出し、「これからは書物の時代なのかもしれない」「内なる辺境への探索には、なんとと言っても書物がいちばんだろう」と異端や辺境を拒む国家への橋頭堡に文学を想定している。「クレ奥ールの魂」に先立って書かれた「異文化の遭遇」（『朝日新聞』一九八七年一月五、六、八日号夕刊）では「カフカの道を内的なクレオール文学の誕生」と見なしている。周囲の人々がチェコ語で話すなか、ユダヤ人でありながらドイツ語で書くことを父親により強制されるという複雑な言語環境に身を置いていたからである。多数の言語が交錯する状況において「中性的な文体」を創造し、それを創作の方法論と

したところに安部は「都市に穿たれた内なる辺境の悲劇」を見、これからの文学の可能性を予見したのである。

このようなクレオール文学という言葉の使い方は、パトリック・シヤモワゾーとラファエル・コンフィエン、ジャン・ベルナベらが定義したクレオール文学、すなわちクレオールの口承性を源泉とし、開かれた異種混雑性の特徴とする文学とはどこか異質でありズレているように思える。⁽¹⁷⁾ 例えば近年、中上健次をクレオール文学として論じることとはしばしばあるが、その際に注目されるのは晩年の作品における「開かれた異種混雑性」と、オリュウノオバに象徴される「語り」の口承性である。⁽¹⁸⁾ それにより日本語という閉じた書き言葉によって成り立つ小説を異化すると考えられている。だがこのような理解が正しく、安部の理解が間違っていると言いたいわけではない。当時邦訳されていたクレオール文献が少なく、得られる知識の制約があったことは否定しないが、より重要なのは、安部がクレオールを思弁的、理論的に捉えていたことであり、クレオール文学論の可能性はそこにこそ込められているはずである。

少数派言語を母語としながらも多数派言語により執筆したカフカをクレオール文学に位置づけた安部の文学論は、同様の観点からカフカを「マイナー文学」として論じたジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリのそれに限りなく近い。⁽¹⁹⁾ 彼らによれば「マイナー文学」とはマイナーな言語により書かれたものではなく、「少数民族が広く使われている言語を用いて創造する文学」のことであり、「大文

字（あるいは確立された文学）と呼ばれる文学の内部での、すべての文学の革命的な条件の特徴を示すもの」にほかならない。⁽²⁰⁾ 支配的かつ正当とされる文学の「内部」から革命を起こすものと「マイナー文学」は定義されているのだ。その代表的な作家にカフカやベケット、ジョイスなどを挙げている。むしろ安部の「クレオール文学」とドゥルーズ／ガタリの「マイナー文学」は完全に一致するわけではないが、少なくともカフカやベケットの文体に注目したうえで支配的な大文字の文学に穴を穿つ契機を見出そうとした姿勢は共通している。いずれにしろ、マイナーとメジャーの葛藤を通して生まれる文学は、否応なしに読者に異文化接触の感覚を強いることになる。

そしてウィリアム・カリーが論じたように、安部の文学もまたカフカ、ベケットの系譜に連なるものだ。一九七五年邦訳の『疎外の構図―安部公房・ベケット・カフカの小説―』では発表時期の制約上クレオール、マイナー文学のことは触れられておらず、また疎外論的な読解に傾きすぎているきらいもあるが、それでも三人の小説から共通のテーマを取り出すカリーの手付きには鋭い洞察が見られる。カリーによれば安部、ベケット、カフカの共通点は「自己の属すべき社会から切断された個人というテーマ」の追求と「強力で普遍的なメタファーを作品の核として用いている」ところにあるとし、次のように述べている。

三人はみな、おたがい遠くかけ離れた事物のあいだに相似を発見するすぐれた才能をもち、しかも彼らが発見したこの事物間の関係を、一個の強力なイメージのうちに統一的に表現する才能にも恵まれている。このメタファー創造の力こそ、彼らの小説技法の核心にある不可欠の要素であり、この世に生きるということがどういうものであるのか、彼らが想像力によって洞察したものに強力な詩的表現を与えているのもまた、やはりこの同じ能力にほかならない。⁽²¹⁾

カリーが重視するのは、「おたがい遠くかけ離れた事物」「事物間の関係」を「一個の強力なイメージ」である「メタファー」によって統一する想像力である。それこそが読者を「この世に生きるということがどういうものであるのか」という疑問にまで誘う標となる。カリーはそのような想像力の源泉に彼らがアウトサイダーであったことを見る。すなわち、チェコのプラハで生きたドイツ系ユダヤ人のカフカ、故国を去ってパリに住むアイルランド人のベケット、満州で育った日本人の安部の三人は、周囲のマジョリティとの軋轢に始終さらされながら自己の感性を育んだということである。

カフカ／ベケットと安部の出自を同一平面上に置く是非はともかく、カリーと安部がカフカ／ベケットから読み取ったものはおそらくそれほど遠くはないはずだ。安部が言う「中性的な文体」とカリーが言う「強力で普遍的なメタファー」とは要するに、国や時代

やイデオロギーを脱色された言葉のことであり、翻訳されてもなお異なる環境にいる読者の心に響く表現のことであるだろう。異文化接触の狭間で生まれるクレオールはどちらの文化に属しつつもそのどちらにも帰属することのない、「中性的」な言語なのである。そのような文体で書かれた文学が自ずと大文字の文学から遠く離れてしまうことに不思議はない。

ここで一本理論による補助線を引いておこう。フォークナーやジョイス、アルトーなどを組上に載せて独自のクレオール文学論を展開したエドゥアール・グリッサンを参照することで、安部の文学論をより先鋭化させることを試みたい。グリッサンによるクレオールとは次のようなものだ。

カリブ海で起こってきたこと、「クレオール化」という単語で要約できるそれが、われわれに〈関係〉とはどういうことなのかを、もつともよく教えてくれる。それは一つの出会い、衝撃（セガレンの使った意味で）、混血であるだけではなく、いまだかつてなかった一つの次元でもある。それは一人一人の人間に対して、ここにいると同時によそに居ること、根づいていると同時に開かれて居ること、山中に迷っていると同時に海面下で自由で居ること、調和し同時に流浪していることを許す次元なのだ。⁽²²⁾

グリッサンにとってクレオールとは何よりもまず「関係」である。しかも単なる「出会い」「衝撃」「混血」を超えた、新たな「次元」における「関係」への跳躍である。一人一人の人間に対して「ここ」にいるのと同時に「よそ」にいて、「調和」していると同時に「流浪」しているような、固定化されことなく他者に向き合い続ける態度のことだ。それにより彼が「関係」の詩学と呼ぶ「同一性は〈他〉との関係に開かれていく」地平が見えてくるわけである。パトリック・シヤモワゾーはグリッサンの「関係」について、「黒人対白人、支配者対被支配者の善悪二項対立」であるような思考を脱し、「それまで遠い存在であった文化や、完全に孤立し絶対であった世界観が互いに出会い、新しい関係に入っていくこと」だと述べている⁽²³⁾。もはや「関係」とは人種間、異文化間接触といった次元ではなく、あらゆる人間に関わる問題となるのだ。

グリッサンの理論体系においては異種混雑性と同時に「世界の響き」と呼ばれる口承性も重視されるわけだが、中心概念である「関係」がドウルーズ／ガタリのリゾームに依拠しているのだとすれば、グリッサンのクレオール論とドウルーズ／ガタリのマイナー文学論は案外似通っている。というのも、彼らがカフカ作品において焦点化していたのもリゾームと呼ばれる関係の網の目だからである。だがより注目したいのは、グリッサン、ドウルーズ／ガタリ、そして安部の四人が、経路に違いはあるにしろ支配的な文学の内部に穴を穿つものとしてのクレオール文学／マイナー文学の記述を通して、

従来とは異なる連帯／関係の在り方を模索していたということである。すなわち、国民意識やイデオロギー、伝統に根差さない、かといって根無し草やコスモポリタニズムでもないような、重層的な関係である。

以上の議論を踏まえたうえで再度、安部が「既成の合言葉や身分証明が通用しない場所」におけるコミュニケーションの問題を追求していたことを思い出そう。異なる言語を使い、別々の文化に属する他者との間に「共通の言語」を発見することが安部の目論見であった。だから安部がクレオールに見た可能性とはおそらく異種混雑性などではなく、世界観／言語観を共有しない者同士が接触してもなお人間固有のバイオ・プログラムにより誕生する中性的な言語の在り方だったはずである。したがって安部が「クレオールの魂」を見出したカフカに始まる「中性的な文体」とは、グリッサンが論じたクレオールと同じで、いわばあらゆる場所にいるあらゆる他者と関係を結び得るような言語のことであつたにちがいない。言い換えれば、安部のメタファーが「おたがい遠くかけ離れた事物」、その「事物間の関係」を結び合わせていたように、「中性的な文体」で書かれた作品は翻訳されてもお遠く離れた他者と関係を取り結ぶことが可能となるわけだ。しかしそれは必ずしも快適な体験であるとはかぎらない。クレオールという現象が異文化接触による言語の（再）開発であつたように、「中性的な文体」で書かれたクレオール文学との遭遇は、自らが所属している伝統や世界観とはかけ離れ

た異質な言語との邂逅を意味し、否応なく読者の言語観あるいは世界観の更新を迫ることになるからである。

優れた文学は常に異文化接触の感覚を喚起する。そのような「書物」との出会い、他者との新たな関係を紡ぎ出すための契機となるはずである。

七、おわりに

かくして安部の言語論は転回した。人間の生理的基盤に根差す「唯物論的な解釈」から、そのような言語を介した他者との関係へ。それはすなわち人間の心が持つ方法による、人間だけに可能なコミュニケーションの追求にはかならない。

安部の言語論が特徴的なのは文学論として結晶したことである。むろん初期の「バヴロフ的言語」への関心がシュルレアリスムに基づく芸術理論と切り離せないものであったことを思い起こすなら、文学論への転回はあるいは回帰と呼んでもいいかもしれない。いずれにしろ、安部にとって言語論と芸術論は不可分なのである。

安部がカフカやベケットに見出した「中性的な文体」とは、伝統から限りなく離れ、「概念からイマジネーション」、「イマジネーションからさらに生理的な裏付け」へと遡った末に得られる「何となく感じて納得できる生理的共通言語」のことであったにちがいない。

どれだけ国や言語が違おうと、人間である限り遍く共有される大

脳や身体感覚レベルで理解できる文体を、安部はクレオールという概念と出会い、クレオール文学を論じる遙か以前から意識的に駆使してきた。安部の文学世界のユニークさはそこに起源を持つのである。それは国や文化、伝統の異なる他者と文学を通して繋がりとする安部の強い意志の反映であるだろう。

注

- (1) 平岡篤頼「夢人間の終末——安部公房『方舟さくら丸』をめぐる——」『文学界』一九八五年二月号、二二七頁
- (2) 渡辺広士「安部公房」『審美文庫』一九七六年九月、六二―六三、八五頁
- (3) クリストファー・ボルトン「歌い合う機械たち——安部公房とサイエンス・フィクション」内藤由直・友田義行訳、『文学』二〇〇七年七月―八月号、三四頁
- (4) 渡辺広士前掲、九三頁
- (5) 荻部直「安部公房の都市」講談社、二〇一二年二月、二三六頁
- (6) 鳥羽耕史「安部公房から筒井康隆へ——バヴロフ的言語とフロイト的言語」『国文学 解釈と鑑賞』二〇一一年九月号、一〇一頁
- (7) 今福龍太「言語の伽藍を超えて——安部公房とクレオール主義」『へるめす』一九九三年十一月号、沼野充義「フロッピー・ディスクの中に発見された手紙——安部公房最後のメッセージ」『へるめす』一九九三年十一月号、今福龍太・沼野充義「クレオール文学の創成——脱帰属するテクノロジー」『ユリイカ』一九九四年八月号
- (8) 鳥羽耕史前掲、一〇一頁
- (9) 角田忠信「日本人と西欧人の文化型と音認識」『言語』一九七四年六月号、引用は『日本人の脳 脳の働きと東西の文化』大修館書店、一九七八年二月、八四頁

- (10) 沼野充義「フロッビー・ディスクの中に発見された手紙——安部公房最後のメッセージ」前掲、七七頁
 - (11) 川本茂雄「訳者あとがき」N・チョムスキー『言語と精神』河出書房新社、一九七六年二月
 - (12) K・ローレンツ『鏡の背面 人間の認識の自然誌的考察』谷口茂訳、思索社、一九八九年九月、一二四頁
 - (13) 沼野充義前掲、七九頁
 - (14) 今福龍太「言語の伽藍を超えて——安部公房とクレオール主義」前掲、六七頁
 - (15) 井上ひさし・小森陽一『座談会 昭和文学史 四』集英社、二〇〇三年一月、三〇四～三〇五頁
 - (16) 今福龍太前掲、七〇頁
 - (17) パトリック・シヤモワゾー、ラファエル・コンフィアン『クレオールとは何か』西谷修訳、平凡社、一九九五年一月、ジャン・ベルナベ、パトリック・シヤモワゾー、ラファエル・コンフィアン『クレオール礼讃』恒川邦夫訳、平凡社、一九九七年一月
 - (18) 浅田彰、いとうせいこう、マッツ・カールソン、柄谷行人、高澤秀次、野谷文昭、渡辺直己『「シンボジウム」フォークナーと中上健次』『早稲田文学』二〇〇三年一月号、高澤秀次『文学者たちの大逆事件と韓国併合』平凡社新書、二〇一〇年一月など参照
 - (19) 「カフカの生命」(『波』一九八〇年十一月号)において対談者の中野孝次がドゥルーズ／ガタリの名を出し『カフカ マイナー文学のために』について言及しているため、後に安部も読んだ可能性は高い
 - (20) ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『カフカ マイナー文学のために』宇波彰、岩田行一訳、法政大学出版局、一九七八年七月、二七、三一頁
 - (21) ウィリアム・カリー『疎外の構図——安部公房・ベケット・カフカの小説——』安西徹雄訳、新潮社、一九七五年六月、二五七頁
 - (22) エドゥアール・グリッサン『「関係」の詩学』管啓次郎訳、インスクリプト、二〇〇〇年五月、四九頁
 - (23) パトリック・シヤモワゾー「戦士と反逆者 クレオール小説の美学」於東京大学本郷キャンパス、二〇一二年二月一日、引用は『週刊読者人』二〇一三年二月二二日号
- 【付記】 安部の文章はすべて『安部公房全集』（新潮社）から引用した。なお、引用に際してルビ、傍点等は省略した。引用文における旧字は新字に変更した。